

指導の場面においてはこのようなことにもっと注目する必要がある。

このほか古籾（福島大）から、子どもの変容をとり出

す時の資料の整理方法等について意見が出された。

（沢田慶輔・神保信一）

d 児 童 II

- 129 発表取消
130 〃
131 道徳判断における手がかり基準性の発達
○波多野 諠余夫（独協大学）
伊藤 恭子（お茶の水女子大学）
132 発表取消
133 意味の安定性に関する個人差の研究
○芳賀 純（神戸大学）
津留 宏（〃）
134 児童の位置関係の理解
田中 芳子（東京大学）
135 系列化の発達とその訓練（2）
—二次元の系列化—
○久原 恵子（東京大学）
井上 早苗（〃）
三浦 香苗（〃）
田中 芳子（〃）
136 性格特性の望ましさを判断に関する
発達の研究
堀 洋道（東京工業大学）

I 全 般 的 特 徴

この部会は3つの発表取消しがあり、5つの研究発表がなされた。発表内容は大別して、波多野他（131）、田中（134）と久原他（136）による Piaget の研究の吟味とその発展に関するもの、芳賀他（133）の意味微分法の測定値の個人差分析、ならびに、堀（136）による性格特性の評定の際の social desirability の発達差の研究の3種に分けられる。

子どもの道徳的判断については、Piaget の動機論と結果論による説明がよく知られている。しかし、波多野他（131）は、この説明では子どもが「よい」「わるい」とする基準が詳しく分らないという理由から、「不利益」を与えるために道徳的にわるいとみなされる行為を対にして、それぞれを cue を2つずつ組み合わせることによって記述し、両者の相対的な「わるさ」の判断から

cue の dominance のタイプを求め、小学生から大学生の道徳的判断の発達をあきらかにしている。Piaget 説の批判的発展の研究として試みられたものである。田中（134）の研究では主に選択法によって、物体間の位置関係、特に、左右および前後という2次元の位置関係の理解の発達を幼児から小学校6年までの4年令段階について求めている。その結果として、左右と前後の位置関係を調整できるようになるのは10才以上と推定している。久原他（135）は前研究（第8回総会）で試みた1次元および2次元の系列化の発達の研究を、特に、2次元系列化についての訓練実験に発展させている。その結果、小学校2年生について訓練の効果が認められている。以上の3研究はいずれも Piaget の研究法を手法として用いながら、それに cue ないしは次元という考え方を導入して積極的に思考モデルを構成し、発展的研究を志向している点で共通していると考えられる。

芳賀他（133）は人格特性を記述する語で Semantic Differential を作成し、小学5年と中学2年生の被験者に1週間間隔で連続4回評定させた評定値の変動を比較した。その結果、変動の個人差と発達差とを認めたが、この差の一部が概念幅と関係があるのではないかという仮説を提出した。

堀（136）は social desirability には異なる被験者群の間にも差がないという説を反証している。48項目の性格特性を小、中、高、大の被験者に、自己について、および社会通念の2通りに評定させ、social desirability の平均値およびその標準偏差値を求めて分析した結果、群間の差、すなわち、発達差が認められた。特に、高校生では自己についての評定と社会通念としての評定との差は顕著であった。

II 討 論 の 内 容

質問とそれに続く討議の中心は殆んど堀（136）および波多野他（131）、田中（134）および久原他（135）に集中した。

まず、堀（136）については、「social desirability

教育心理学年報 第7集

について地域差はあるか(芳賀)」の質問に対して、この研究の被験者は小・中については中央区、高もそれに対応する地域からとってあることの説明があった。また「男女差の有無」については「有り」という答えが得られた。次に、「被験者の評定における判断は、個々の特性についての個別的な学習の結果と考えるか、特性群としてあらわされる価値の学習と考えるのか(波多野)」という問題点に関しては、「それは、ことばの上での条件づけかも知れないが、一般には価値として学習されたものと考えられる」ということ、および「特性尺度を因子分析法などを通じて分類してその構造的な面から価値的なものを明らかにしてゆく」ことが今後の研究方向として挙げられた。また、このような研究結果は、だれにとってののぞましきか、すなわち男女・長子・中間子・末子などの家族的条件により異なるのではないかという疑問も提出された。

波多野他(131)、田中(134)および久原他(135)については、その共通問題点として「cue dominanceが発達的に変るのか、それはどんな学習によると考えられるか(南館)」という疑問が提出された。波多野によりこれに対して「現在、cue-response correlationsのパターンにより道徳判断の発達を記述すること」を試みているが、「実験者があらかじめ適切なあるいは重要な次元を設定して、それを子どもに学習させた場合にどこまで達成できるか」といった形の学習実験を考慮しているという説明がなされた。この点に関しては、道徳判断の発達における外的強化と均衡化の役割」という側面から、もっとつっこんだ考察と実験が要求されるのではなかろうか。

この問題点については久原他(135)とも関連するが、「訓練によって効果があることが認められるが、実験がもっと大きなところでどんな意味をもっているかを掴むことの必要感(久原)」、「訓練をするということを支えるためのtheoryの必要(井上)」を感じるという補足説明があった。

訓練実験のカリキュラムをつくるための基礎的な考え

方。つまり「metatheory(波多野)」に関しては、久原他(135)の訓練効果の結果の解釈の問題と結びつけて、更に討論が進められた。

南館は「次元や学習の基準を実験者が決定することにより生ずる主観性をどう扱うべきか」の疑問を提出、波多野は「久原他(135)が訓練を与えたのはそのtaskの要求しているbehavioral sequenceをあきらかにすることには役立つが、さらにそれを心理的processに翻訳する必要がある」とのべ、三浦は「実験者が自らの実験の中に想定する実験の論理以外に、他のfactor(例えば、子どもが教示を理解した、など)が関与する余地がある」とのべた。実験から結論を引き出す基礎となる論理をtaskや実験者の方によりorientさせるか、それとも被験者の方にorientさせるかの条件に関する意見も出された。この点に関して芳賀は「思考研究ではこのようなorientationについての意識をもつのは研究者として必要ではないか」ということ、および、「このようなorientationをどの地点に定めるかは、他科学と心理学との境界線上の問題となるのではないか」という意見を出した。

訓練効果については、更に、「訓練をするということと発達心理との関係(名取)」についての関係はという質問があり、ある年齢になると特別な訓練なしに、それができるようになるというよりも、この段階でこのような訓練をすればできるようになるということを心理学的に明確にしてゆく方が、豊かな心理学説になる」という答えがなされた。なお、そのような研究を具体的に進める上で、「taskの分析と並んで、今後もっとprocess analysisを行う必要があるが、その際taskをどのようにprocess化するかがむずかしい。現在、Gagnéに代表されるような知識の階層説があるとしても、まだ、多くの未解決の部分がある(波多野)」ということが指摘された。

以上で、予定した討議時間を超過する状態で活発な討議を終えた。

(芳賀 純・波多野 諠余夫)